院長のひとりごと２

テーマ「AMATが被災地へ」

令和６年元旦、いきなりのニュースでした。

「能登半島地震」

平成２３年の東北大震災、平成２８年の熊本地震。いずれも日本国内を文字通り震撼させることでした。平成３０年７月の西日本豪雨災害の折には、ＡＭＡＴ（All Japan Hospital Medical Assistance Team：全日本病院医療支援班）からの派遣依頼を受け、当院ＡＭＡＴは岡山県倉敷市真備町にて、主に災害の後方支援を行いました。災害医療支援にはＤＭＡＴ（Disaster Medical Assistance Team）とＡＭＡＴがあり、ＤＭＡＴは国の定める災害拠点病院が運営し、ＡＭＡＴは全日本病院協会が指定しています。

今回もいち早くＡＭＡＴより派遣依頼があり、当院は宮薗救急部長以下、看護師、救急救命士の３名が率先して手上げをし、本日勇んで出発して行きました。しかも今回は輪島市立病院での活動が目的であり、まさに被災地の最前線であります。道路状況も分からず、給油のあてもなく、二次災害にだけは合わないようにと念を押しましたが、気合も入っており多少心配です。災害支援の場合、全て自己完結型で、救急車はもちろん、自分たちの食事、水、毛布等全て持参しなければなりません。非常用電源も持って行きました。数日の応援予定で、４日後には帰院予定ですが、無事帰って来て下さいね‼

皆さん、災害はいつ起こるかわかりません。備えも必要ですが、職員には家族で万一の場合の集合場所を決めるようにいつも伝えています。近隣で大規模災害があれば、まず病院へ来るようにとお願いしています。明日は我が身、お互い助け合おうと思いながら、ＡＭＡＴの３人、君たちは凄いよ。頭が下がります。ありがとう。

令和六年一月九日　藤井　茂

第二十五章